

出会いが面白くて人助け チャレンジ精神が根底に

AMDAインターナショナル理事長

菅波茂

洋の浜辺で、同じ年恰好の日本兵がうつぶせで死んでいた。「死」を痛烈に感じた。その時鳴っていたセミの声は今も耳に残る。

入学した岡山大は学生運動のさなかだった。「敵と一味方」に二分するやり方に嫌気が差し、一年近くアジアを旅した。

AMDAインターナショナル(アジア医師連絡協議会)の活動の底には、広島人のチャレンジ精神があると言っ。例に移民、流川のにぎわい、カーブを挙げた。面白がり、何くそとはい上がろうとする根性。

表舞台に出たのは一九九二年春だった。バンクラデシュに流入したミャンマー難民のため医療チームを派遣した。この日まで挫折や我慢の繰り返しだった。

七九年、タイ、カンボジア難民の力になろうと、医学生二人と乗り込んだ。キャンプの場所もわからない。バンクで聞き回り、国連難民高等弁務官事務所が取り切っていると初めて知る。

ようやくとどろくと、ドイツの医師に「手が足りている」と断られた。国際協力事業団(JICA)の医療チームが来た。勇んで名乗り出たが、「責任が持てない」と相手にされなかった。情熱は空回りした。一週間で帰国した。

活動の原点は高校時代に見た一枚の写真である。南太平

帰国した七〇年からは毎年、タイやネパールへ医学調査団を送った。カンボジア難民救援は、決して思いつきではなかった。それだけに、熱意だけでは何もできない現実打ちのめされた。

その後はひたすら国際会議を重ねた。ネットワークづくりと情報収集。この十年余りを元詰めかして「不遇の時代」と呼ぶ。「人との出会いが面白かった。人の役に立ちたいなんて思っていたら、とっくにやめていた」。九二年はようやく巡って来た出番だった。

いま世界四十九の活動拠点で約四百人が働き、一万人以上を支える。大きくなった。動機は好奇心、理念は「困ったときはお互いさま」。人を救う目的のためなら、無原則、無思想、時には無節操でも構わない。

「広島の人助け精神は、『平和都市』の看板に金縛りになっている」と挑発的に言う。「平和というのは、戦争がないだけじゃない。災害と貧困をなくすために、ため込んだ力を爆発させてほしい」

(増田泉子)



病院の一角にあるAMDA事務所、ボランティアに声をかける

すがなみ・しげる 広島県神辺町出身。55歳。岡山大学医学部大学院で公衆衛生学を修める。勤務医を経て、81年に岡山市内に内科医院を開業。その間もアジアの医学生生の会議を重ね84年、AMDA設立。これまで約50カ国で緊急援助活動や開発プロジェクトを実施した。特に95年は、阪神大震災、朝鮮民主主義人民共和国、北朝鮮の洪水などで成果を挙げ、国連にNGOの認定を受けた。現在はアフガニスタンなど19カ国で活動中。岡山市楠津で営む医療法人の中に、事務所を置く。